

北恩加島幼稚園

1、園の教育目標

生涯にわたる人格形成の基礎を培う最も重要な時期を担うことを肝に銘じ、発達の特徴をふまえながら、幼児期にふさわしい生活を展開することを通して、健康で豊かな感性と創造性、自立と協同の精神をもつ子どもを育成する。

<たくましく心豊かな子どもに育てる>

・自分で考えて行動する子ども ・やさしく思いやりのある子ども ・友達となかよく遊ぶ子ども

<子どもの目標>

「あかるく」 「なかよく」 「げんきよく」

2、本年度に定めた重点的に取り組むことが必要な目標や計画をもとに設定した幼稚園評価の具体的な目標や計画

評価の項目ごとに教職員が達成度等を自己点検、自己評価することで、今後に向けての目標を明確化、指導力のスキルアップにつなげることを目指す。また、施設・設備の改善と共に教育内容の更なる改善も念頭に入れた取り組みも重点目標とする。

3、評価項目の達成及び取組状況

評 価 項 目	取 組 状 況
幼稚園教育要領の精神を踏まえ、園の教育理念や教育方針にしたがい、教育課程を編成する。	より良い教育課程となるよう教職員の共通理解を深める協議を重ねて、編成に努めた。
指導計画は教育要領や教育課程、子どもの実態などをもとに考えて作成している。	年度ごとの反省を重視しつつ、毎年、指導計画を見直し、子どもの実態を踏まえた内容となるように努めてきた。
子どもが自ら活動を展開していけるような場や空間等、人的・物的環境を構成する。	子ども達の積極的な活動となるよう、意図的な環境構成を工夫すると共に支援体制も研究してきた。
子どもの実態を的確につかみ、計画的・具体的な手立てを講じる。	子どもの実態を的確につかむため、日々の記録も重視しつつ、日案の作成に反映させている。
常に子どもの健康に留意すると共に、園内の安全にも配慮し、適切に処置する。	常に子どもの様子を捉えて、健康面、安全面に気を配り、対処している。園内等環境面においても危険予知能力も高め、対処している。
人権感覚を高めると共に、あこがれを形成するモデルとしての姿を心がける。	善悪の判断・思いやり・いたわり等、道徳心の発達に視点をあてた指導に心がけている。発達段階も念頭に入れ対応している。
各クラスの研究主題を設定し、成果と課題を報告し合うと共に、教職員全体の共通理解を深める。	日々の目標に加え、週目標・年目標等各クラスで工夫しつつ設定している。主として、週案で報告し合い、成果と課題を確認し、全教職員と理解のもと、次への対応につなげている。
子どものよさを認めて評価しようとしている。	子ども一人ひとりの特徴に視点をあて、より良き成長となるよう教職員の共通理解を得ながら対応をすすめている。
規則正しい生活習慣の定着に向けての指導・支援を行う。	登園時からスタートし、活動・学びの時間に規則制を重んじると共に、トイレタイム・手洗いうがい・昼食時間などにも配慮して対応している。
設定保育や実技研修会を行い、指導力を高める。	指導力を高めるため、場面研修や実技の研修を重視して対応してきている。
各研修会や研究会に積極的に参加し、その成果を提供し合う。	積極的に各種の研修会・研究会に参加している。また、講師を招いての園内研修も行い、学びを資料にまとめ、園内会議等での共有化を図ってきた。
園だより、クラスだより、ホームページ等を通して、幼稚園の情報を発信する。	保護者にむけて、教育方針や取組情報の発信は園だより・クラスだより・ホームページなどで積極的にすすめてきた。

教育目標や経営目標と連鎖した評価項目を作成し、PDCAのサイクルを確立する。	PDCAのサイクルは常に意識し、反省・改善を重んじ、より良き教育となるよう、教育目標・経営目標の改善となるよう努めてきた。
--	---

4、幼稚園評価の具体的な目標や計画の総合的な評価結果

教職員一人ひとりが日々の活動や行事における目標を常に心に留め、自己点検・自己評価し、学年間・職員会議で取組を協議することにより、本園としての方針を明確にすることができた。

また、評価項目を念頭において実践を積み重ねてきた結果、各自のスキルも向上してきている。

5、今後取り組むべき課題

課 題	具体的な取組方法
自己点検・自己評価	自らの評価をもとに、自己の課題を知り、この解決を図るよう研讃に取り組んできた。また、更なる資質の向上を目指すための園内外の研修への積極的な参加を重要視する必要がある。
教育に関する情報収集と活用能力	常に幼児教育の情報収集に努め、指導計画の見直しを行うなど教育に対しての改善を視野に入れた対応に努めてきた。 今後も更なる情報活用能力の高まりが求められる。

6、学校関係者評価委員会の意見

少子高齢化の時代背景がある中、前年度は、少子化の煽りはあまり受けない状況であったが、次年度、4月入園に向けての満3歳児の園児数が減少を示した。園の対応としては、少数での手厚い指導の充実の更なる推進とその継続に力を注いだ。意見内容は次の通りである。

- ・園の教育方針に基づき、全教職員が情報交換を密にし、使命感に燃え、同一姿勢で真摯に課題追及に努めていた。
- ・未就園児保育（ひまわり組）を通して、満3歳児からの入園希望がやや減少に転じた。少子化現象に加え、3歳未満の常時預かり保育への希望増加も考えられる。
- ・情報公開（参観やホームページの充実、地域との交流等）を積極的に行い、保育活動の見える化が図られている。
- ・各種行事を通して、最後までがんばる姿や友達をいたわる姿、いろいろな楽器を上手に使いこなせるスキルや姿、作品展を通しての発想力のすばらしさや出来栄等、園児たちの素晴らしい力、底知れない能力に感服した。